「エブリ・ブリリアント・シング」

～ありとあらゆるステキなこと～

作：ダンカン・マクミラン　ジョニー・ドナヒュー
翻訳・演出：谷賢一　出演：佐藤隆太

インタビュー　**佐藤隆太・谷賢一**

“こんな奇跡が起こせるんだ!”という芝居に

“ブリリアント・シング”を1000番まで集めたら――。
佐藤隆太主演、谷賢一翻訳・演出の
一人芝居が日本初演。
二人に、作品への想いを聞いた。

野田秀樹や故蜷川幸雄など、名だたる演出家たちの舞台で重要な役どころを演じ、その幅広い演技力で観客を魅了してきた佐藤隆太。デビュー20周年を迎えた彼が今回挑むのは、ダンカン・マクミラン、ジョニー・ドナヒュー作、谷賢一翻訳・演出による一人芝居「エブリ・ブリリアント・シング」だ。2013年にイギリスで初演、翌年にはエジンバラ国際演劇祭で再演され、以降世界各地で上演されている本作は、“ありとあらゆるステキなこと・もの”を探し続けている、ある男の物語。今年の初秋、本作のユタ公演を観た佐藤と谷は、その印象を興奮気味に語った。

佐藤　自分が演じるということを一旦忘れて、観客として純粋にこの作品を楽しめたことがとてもうれしかったです。劇中ではお客さんもいろいろな役割を担うんですけど、だからこそみんなで作り上げた、走り抜けたという感動があって。他の作品ではなかなか味わえない空気なんじゃないかなと思いますね。

谷　台本も発想も素晴らしいし、日本のお客さんは今、こういう作品を求めているんじゃないでしょうか。劇場にただ行くだけじゃなくて、ちょっと参加してみたいという人は一定数いますし、やっぱり演劇を観る醍醐味って、その日だけのものが観られること。その点、この作品ほど“今日だけのもの”が観られる舞台って、そうないですから。

想像できなさすぎて、ワクワク

本作が人気を博す理由のひとつに、演者と観客の距離が近い、トークライブスタイルが挙げられる。観客はあらかじめ渡されたカードに則って、ある単語を読み上げたり、役を演じたりしながら、演者と一緒に作品を作り上げる。

谷　いわゆる観客参加型演劇に抵抗がある人って結構多いと思うんですよ。でもこの作品は一般的な観客参加型演劇とは全く違う形式で、手法が非常にオシャレ、洗練されている。お客さんも抵抗なく入ってこられる、すごいポテンシャルを秘めた作品だと思います。

佐藤　台本で読む印象より、実際の上演では楽しい瞬間がすごく多いんです。僕も、お客さんが1時間をあっという間に感じるような、いろいろな表情やテンポ感で芝居を進めていきたいと思っています。

何しろ今回、舞台に立つのは佐藤一人。初めての一人芝居に、佐藤はどのような想いを抱いているのか。

佐藤　あまりの想像のつかなさに、むしろワクワクしています（笑）。もちろん怖さはあるんですけど、それ以上に「どうなるんだろう」という気持ちが強いですね。それに、「こりゃ大変だぞ……」という予感がする作品って、今までの経験上、自分にとって大きな意味を持つ作品になることが多いんですよね。こんなスタイルの作品のオファーをいただけることもこの先ないと思いましたし、1枠しかないキャスティングボードに僕の名前を挙げていただいたなら、ぜひ飛び込んでみたいなって。

そんな佐藤の様子に、谷は厚い信頼を寄せる。

谷　隆太さんは普段お話している時でも心を開いて話してくれる。そういう人柄が、劇中でお客さんとやりとりする時にも良い効果を生むんじゃないかなと。隆太さんならお客さんと素晴らしい空気を作ってくれると予感しています。

稽古ではまず谷と佐藤の2人で“作戦会議”し、その後、徐々に“観客役”を招き入れて、実戦に近い形で進めていく予定だ。

谷　舞台美術をシンプルにしたいなと思っていて。それこそスーツケースひとつ持っていけばどこでも上演できるくらいミニマムなものになると思います。「こんなに何もないところで、こんな奇跡を起こすことができるんだ！」ということを感じてもらえたら。

佐藤　観劇後、ユタでのホテルへの帰り道で、谷さんが「僕は日本での公演がいいものになるんじゃないかなって思いますよ」と言ってくださって、本当に心強いなと。谷さんと一緒に、僕たちなりのいいお芝居が作りたいと思っています。

本番に向けて、2人のタッグはより強く、確かなものになっていく。

取材・文：熊井玲（ステージナタリー）

1月25日（土）～2月5日（水）
シアターイースト
作：ダンカン・マクミラン
　ジョニー・ドナヒュー
翻訳・演出：谷賢一
出演：佐藤隆太

詳細はP10へ

佐藤隆太

谷賢一

新潟、松本、名古屋、大阪茨木、高知公演あり　特設サイト ebt-stage.com

「カノン」

作：野田秀樹　演出：野上絹代

野上絹代

撮影：井上佐由紀

インタビュー　野上絹代

効率が重視される今、“無駄”にキボウを抱くために

思想と理想を掲げ、限りない夜の闇に潜む「自由」を求めて疾走する若者の焦燥と躍動。4年の時を経て、『カノン』がシアターイーストに帰ってくる。

東京芸術劇場は、芸術監督を務める野田秀樹の戯曲を国内外の演出家によって上演するシリーズ企画に取り組んできた。第5弾の演出家として白羽の矢が立ったのは、演劇カンパニー「快快（ファイファイ）」に所属する野上絹代である。

きっかけとなったのは、2015年の演劇系大学共同制作企画で、野上が野田秀樹の『カノン』を演出したこと。数ある戯曲の中から『カノン』を選んだ理由について、彼女はこう振り返る。

「そのときは出演者もスタッフもほぼ大学生だったので、大学生が自分たちで考えることができて、大学生が演じても違和感がない戯曲がいいなと思ったんです。『カノン』は1972年のあさま山荘事件がモチーフになっていて、あの事件は大学生くらいの若者が引き起こしたものだから、そのことを大学生たちと一緒に考えて上演できたらなと思って選びました」

あさま山荘事件について、野上は以前から興味を抱いていたという。鉄球が山荘を直撃する映像には見覚えがあったけれど、その事件について歴史の授業で習うことはなかった。

「上演に向けてあらためて調べてみると、すごく人間的な話だと思ったんですよね」と野上は振り返る。「思想として理想的なことを掲げるときに、人間的な部分を無視しちゃってて、そこから歪みが生じてあんな大事件になっちゃったのかなと思ったんですよね。だから、自分たちの弱さやずるさ、くだらなさを傷としてちゃんと持っておかないと、大変なことになるんだな、と」

あさま山荘事件について調べ、戯曲を読み込んで、2015年に野上演出の『カノン』が上演された。それを観た野田秀樹が「冴え渡った演出に吃驚し、再演をすれば、更に磨きがかかるのではないかと思った」と言葉を残したことで、2020年の春、野上演出で再度上演されることになったのだ。「“無駄”に“キボウ”を抱いてくれる俳優」というフレーズのもとに出演者を募ると、1200通を超す応募があり、オーディションが行われることになった。

「今はすごく効率が重視される時代で、これから先はどんどん人の手が要らなくなると思うんです。でも、演劇は人がいないと成り立たないものだし、人間が持っている一番の魅力は無駄なエネルギーみたいなところにあるんじゃないかな、と。効率とは逆の方向にあるものを、未来に希望として残していくことを目的としてくれる人と一緒にやりたいなと思ったんです」

今の時代を、野上は「分断の時代」と評する。そして、分断を超克しうるのはユーモアである、と。

「同じところで笑っちゃったときって、繋がりを感じるじゃないですか。喧嘩してても、テレビの同じ場面で笑っちゃって、空気がほぐれることってありますよね。ユーモアって、分断の壁に風穴を開けられるような気がしますね」

野田秀樹の戯曲は言葉遊びに溢れ、イメージが乱反射する。その縦横無尽に広がる世界は「ただただ圧巻ですよね」と野上は語る。

ポイントとなるのは、あさま山荘事件をモチーフとしながらも、『カノン』が時代劇として進んでいくことにある。

「この作品は、途中までは時代劇なんですけど、くるっと現代に変換する場面があるんですよね。それを観て、今の時代ってどういう時代なんだろう、そしてこれから先の時代はどうなるんだろうってことを想像してもらいたくて。それを観客の皆さんに手渡せたらなと思います」

取材・文：橋本倫史（ライター）

3月2日（月）～3月15日（日）　詳細はP13へ

シアターイースト

作：野田秀樹　演出：野上絹代

出演：中島広稀　さとうほなみ／名児耶ゆり　永島敬三　大村わたる　山本栄司　長南洸生　緒形敦　川原田樹／中林舞　手代木花野　佐々木美奈　前原麻希　本多遼　湯川拓哉　小田龍哉　村田天翔　佐野功／木津誠之　家納ジュンコ　佐藤正宏／渡辺いっけい

「カノン」関連企画 10代からのGeigeki観劇クラブ 第1回『カノン』

3月14日（土）15：30開始 リハーサルルームM2　詳細はHPへ

「カノン」観劇後レビューを持ち寄って参加者でシェア～みんなの批評版『カノン』作りにチャレンジ！高校生、U25を対象とした、観劇後交流イベント。「カノン」を見て、思ったこと、感じたことを素直に観劇後レビュー（1000字以内）という形で表現してみてください。

進行：木村覚（美学研究者、ダンス批評、BONUSディレクター）　佐久間新（ジャワ舞踊家）

【対象】「カノン」高校生以下チケット、25歳以下チケットをお持ちで3月8日（日）までに観劇できる方

【料金】無料（ただし、公演鑑賞は各自チケットをお手配の上、ご鑑賞ください。）　【定員】12名（先着順・要事前申込）

【お申込期間】～2020年3月1日（日）　【お問合せ】東京芸術劇場 教育普及担当 03-5391-2116

音楽劇「星の王子さま」

原作：アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ
脚本・演出：青木豪

伊礼彼方　昆夏美　廣川三憲（ナイロン100℃）

観れば心が豊かになる音楽劇、待望の再演！

サン＝テグジュペリの世界的ベストセラーを、オリジナル作品からシェイクスピア劇までを手がける劇作・演出家の青木豪が新たに音楽劇として創り上げた『星の王子さま』。2015年12月～2016年1月に高い評価を得た舞台が、待望の再演を迎える。砂漠に墜落してしまった飛行士と、いくつもの星を旅してきた、小さな王子さまとの対話から見えてくる、生きる上で大切なこととは……。初演に続いて主軸を担うのは、今やミュージカル界のトップランナーとなった昆夏美と伊礼彼方だ。王子さまそのままの愛らしさを持つ昆は、力強く情感豊かな歌声で、時代・世代を超えて私たちの心に響く言葉を届けてくれる。また伊礼は、最近では青木演出の『相対的浮世絵』など、ストレートプレイにも精力的に取り組んできた実力派。2019年の『レ・ミゼラブル』ではジャベール（伊礼）とエポニーヌ（昆）という大役で共演した２人に、同じく初演メンバーの廣川三憲（ナイロン100℃）が加わり、より深化した『星の王子さま』を見せてくれるに違いない。ちなみに青木にとってシアターイーストはかつて主宰していた劇団グリングの旗揚げ、解散公演を行った縁の地でもある。「大切なものだけを残して、余分なものを削ぎ落とした」と青木が評する原作の面白さと、ピアニストが薔薇役を担うなどオリジナリティあふれる演出の融合に、イマジネーションを掻き立てられる音楽劇。観た人それぞれに感動がある、豊かな時間を味わって欲しい。

文：宇田夏苗（演劇ライター）

2月8日（土）～12日（水）シアターイースト　詳細はP11へ
原作：アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ　脚本・演出：青木豪
作曲・音楽監督：笠松泰洋
出演：昆夏美　伊礼彼方　廣川三憲（ナイロン100℃）
吉田萌美　内田靖子　岡野一平　平山トオル　原田智子
沼舘美央　大内慶子　堀江葵月
ピアノ演奏・薔薇：松木詩奈
コントラバス演奏：小美濃悠太（2/8～9）　内田義範（2/10～12）　**水戸、兵庫公演あり**

芸劇dance 勅使川原三郎ダンス公演

「三つ折りの夜」

演出・振付・照明・美術：勅使川原三郎

勅使川原三郎　photo by Rihoko Sato
佐東利穂子　photo by Akihito Abe
庄司紗矢香　©Norizumi Kitada　UMLLC

ダンスと音楽の3人の偉才が拓く、夜/生の時間の秘める謎

今、ダンスは振付家ごとに多様なスタイルが並存する面白い時期にあるが、勅使川原三郎は、舞踊と音楽、言語の関係の探究、芸術的な照明と舞台美術で国際的に高く評価されている。彼と長く協働する佐東利穂子、欧州が拠点のヴァイオリニスト庄司紗矢香による新作、東京芸術劇場での世界初演だ。

創作の核は、フランスの象徴派詩人ステファヌ・マラルメが1887年に「トリプティック」として発表した3編のソネ（14音節詩）。更け行く夜、刻々と光が室内に浸透し、木材や陶器、大理石やレース、絹のテクスチュアをまとい、人間の生と死、愛の符号となる。純度の高いことばが反響し共鳴してイメージを結ぶ、類い稀な言語の芸術だ。

昨年の芸劇での『月に憑かれたピエロ』『ロスト・イン・ダンス―叙情組曲―』、一昨年にパリ・オペラ座バレエ団に振り付けた『グラン・ミロワール』でも勅使川原はフランス語の詩に発想を得たが、マラルメは群を抜いて難解な詩人。それは言葉で描写的な事物や現象の明示を行わず、逆に人間が与えた意味を剥ぎ取り、言葉をそれ自身として捉え直すことを強いるからだ。

マラルメは通貨にも似た言葉の単純交換を嘆いたが、勅使川原も「わかりやすさと引き換えに失われるもの」に危機感を抱き、「ダンス＝振付の知識」という思考を問い直す。このテーマに対する庄司の提案は、バッハ『ラルゴ』、ストラヴィンスキー『エレジー』、イザーイ『サラバンド』、ペンデレツキ『カデンツァ』などの珠玉のヴァイオリン・ソロ。マラルメの純粋言語をめぐり、卓越した身体と音楽が「ダンスとは何か？」という問いに挑む。

文：岡見さえ

3月6日（金）～3月8日（日）プレイハウス　詳細はP13へ
演出・振付・照明・美術：勅使川原三郎
ダンス：勅使川原三郎　佐東利穂子　ヴァイオリン：庄司紗矢香　**名古屋公演あり**